

和歌と短歌－嵯峨・広沢のこと

坪内稔典

柿という果物が好きです。ここ、すなわち佛教大学宗教文化ミュージアムのある嵯峨、広沢のほとりは、秋になると柿が目立ちます。松尾芭蕉にちなむ落柿舎は、このあたりの観光名所ですが、大きな柿の木があって、その柿の実が嵐山から吹いてくる風で落ちる、というので、柿の落ちる家、すなわち落柿舎という名前がつきました⁽¹⁾。

柿は英語でも KAKI で、今では世界的になった日本を代表する果物です。もっとも、皮をむいて食べるのがめんどくさいからでしょうか、大学生などはあまり食べないですね。でも、たとえば明治時代に活躍した正岡子規は大の柿好きでした。学生時代、奨学金が入ると、まず牛肉を食べて精をつけ、それから好物の果物を食べました。秋だと、大きな渋抜きした柿を一度に七つか八つ食べました。

そうそう、子規の親友だった夏目漱石はですね、小説「三四郎」のなかで、子規というやつは柿を一度に16個も食べて平気だった、と書いています。実際にはどうだったか、前に調べたことがあります。学生時代の7つか8つが一番たくさん食べた記録のようです。

子規には次の歌があります。

御仏みほとけにそなへし柿の残れるをわれにぞたびしとお十まりいつつ

「十まりいつつ」は10余り5個、すなわち15個です。仏さまにそなえた柿のあまりの15個をわたしにくださってありがとう、という意味の歌です。知り合いの京都の坊さん、愚庵という人なのですが、彼が寺にあった柿を枝付きのまま、東京に行く人にことづけたのです。柿好きの子規に京都の柿をプレゼントとしたのですね。その柿が15個だったのですが、子規はそれを一度に食べたわけではなかったようです。漱石にはこの15個の柿の記憶があって、それで、友人・子規の柿好きぶりをちょっとオーバーに、おもしろく世に伝えたのではないのでしょうか。

今、子規の柿の短歌を紹介しましたが、子規の柿といえば

柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺

この俳句が有名ですね。柿好きだったからこそできた句かもしれません。子規は

世の人はさかしらをすと酒飲みぬあれは柿くひて猿にかも似る

という短歌も残しています。世間の人ばかりこぶって得意そうに酒を飲んでいる、でも、自分は酒より柿が好き、柿を食べて猿に似ているが、それでいいんだ、という歌です。彼は実は酒がほとんど飲めなかったのです。ですから、この歌は、酒の飲めない者の負け惜しみの歌かもしれません。

ところで、子規は柿の歌を作っていましたが、和歌では柿を詠みません。子規たちの短歌の時代になって、柿は登場してきます。

万葉集に柿本人麻呂という大歌人がいます。この人、家の門口に大きな柿の木があったので、それで柿の本と言った、というエピソードありますが、その彼にも柿の実を詠んだ歌はないのです。

万葉集には5757を長く連ねた長歌があり、柿本人麻呂などはその長歌の名人でした、ほかに旋頭歌や片歌、仏足石歌、そして57577の短歌など、いろいろなスタイルの歌があって、それらをまとめて和歌と呼びます。和歌は大和の歌、すなわち日本の歌ですね。この和歌という名前は中国からやって来たいわゆる漢詩を意識した名前です。日本にはいわゆる大和言葉で作る和歌と、中国渡来の漢字で作る詩とがありました。2つをまとめて詩歌と呼びました。2つの詩歌の伝統は明治時代まで続いていて、明治時代の子規や漱石にとって、詩といえば漢詩でした。実際彼らはたくさんの漢詩も作っています。

万葉集の和歌は、やがて京都の貴族たちによって洗練されます。平安時代、古今和歌集、後撰和歌集、新古今和歌集などが天皇のもとで編集されます。勅撰和歌集です。そして、和歌、漢詩を作ることが貴族の必須の教養のようになります。武士の時代になると、武士すなわち男は漢詩を、そして地位の高い女性たちは和歌を詠むというように二極化して、それが明治時代まで続いていました。

以上のような和歌は、別の言い方をすると雅の文芸でした。古今和歌集、源氏物語、伊勢物語などの言葉を用いてつくる文芸でした。もっとわかりやすく言うと、和歌では柿などの食べ物は詠みません。京都御所の回りに住んでいた貴族の庭には柿の木があって、柿を普通に食べていたのですが、柿を歌には詠まなかったのです。古今和歌集に、そして代表的な和歌を集めた百人一首にも柿の歌はありません。なぜか。柿が食べ物だったからです。

雅の文芸の和歌は、雅でないもの、すなわち俗なものを排除しました。俗なものとは日常的なもの、日々の暮らしそのものです。その俗の代表は食べ物でした。だから、和歌には食べ物が登場しません。

伊勢物語にですね。雅と俗を理解するに便利なというか、分かりやすい話があります⁽²⁾。伊勢物語の主人公は在原業平をモデルにした雅な男です。その男が、河内の国、高安というところに（今の大阪府八尾市のあたり）恋人が出来て通うようになりました。恋人とすっかり慣れ親しんだある日、男が久しぶりに女を訪ねたら、女はある事をしていました。男は、とっても嫌な気持ちになりました。この女は雅でないと分かって、もう女の元へは通わなくなりました。振ってしまったのですね。

さて、河内の国高安の女は何をしていたのでしょうか。柿を食べていた？ うん、河内は今でも柿の多いところですから、柿を食べたと思います。柿は平安京の貴族たちだって食べていたのですよ。

女は何をしていたのかというと、「手づからいひがひとりて、けこのうつわ物に盛」ったのです。手にしゃもじを持って、自分でごはんを盛ったのです。その行為が雅でなかったのです。

和歌はですね、自分で食べ物に直接にはふれない、そういう階級の人々が作る文芸でした。ちなみに、御所に勤める女性たちは、食べ物を俗世間とは別の名で呼びましたよね。もちは堅いからかちん、ねぎは一文字^{ひともし}というように。これらを女房詞と言いますが、俗を排除するために作られたのがこの女房詞でした。あっ、飯や汁をすくう道具を言うしゃもじも代表的な女房詞です。

つまり、和歌はですね、日常、すなわち俗とは異なる雅な世界の歌です。言葉も古今和歌集や源氏物語の言葉を用いるのです。現代人は女も男も気軽に料理しますが、そんな人はかつては雅でなかったのです。和歌を作る資格がなかったのです。

ちなみに、広沢池は、そのような和歌の聖地でした。和歌に詠むべき土地を歌枕と言いましたが、広沢池はまさにその歌枕で、秋の月とともに連想される池でした。広沢池＝月というイメージが定着していたのです。広沢池を詠んだたくさんの和歌がありますが⁽³⁾、残念ながら私には面白くなくて覚えられません。覚えていません。私が俗な人（俗人）だからでしょうね。

それはともかく、江戸時代になると、食べ物などの俗を詠む人が現れますが、でも、まだそれは異端、例外でした。最初に話した正岡子規、そして与謝野晶子や石川啄木などが登場して、57577でも俗なものが盛んにうたわれるようになります。そして、それらの歌は和歌ではなく、短歌と呼ばれるようになってゆきます。どんなことでも歌ってよい57577音の歌、それが短歌ですね。

砂浜のランチついに手つかずの卵サンドが気になっている

生ビール買い求めいる君の手をふと見るそしてつくづくと見る

俵万智さんの歌集『サラダ記念日』(1987年)にある歌です。この歌集は出た当時、大ベストセラーになりましたが、卵サンド、生ビール、サラダなどの俗が自在に詠まれたまさに俗の歌集でした。

話があちこちに飛びましたが、かつて和歌の聖地だった嵯峨や広沢が、こんどは短歌の聖地になってもいい気がします。高校生や大学生が広沢の池で、あるいはこの佛教大学宗教文化ミュージアムの周辺で、弁当などを食べながら恋の短歌を詠む、そういう言葉の愉しみというか、表現の楽しみがあってもいいのではないのでしょうか。

では、最後に歌集「雲の寄る日」(2019年)から私の歌を挙げて話を閉じます。

カキフライまず食べてから話したい不信や疑惑、ソースのことも

まずカキフライを食べよう、それから話そうという短歌です。私は実は海の牡蛎も大好きです。

〈注〉

(1) 向井去来「落柿舎ノ記」

(2) 「伊勢物語第」第23段

(3) 「更科も明石もここにさそひ来て月の光は広沢の池」(慈円)など。

※柿の話題については小著「柿日和-喰う、詠む、登る-」(岩波書店、2012年)を参照してほしい。